

土壁づくり_1

2011-2012年

カリキュラムが改編され、2011年度から2単位選択必修の横断型実習授業「テーマ演習」となり、参加者も18名に増えた。自主性を重視し、出欠簿も自己記入とした。



新体制で壁の窓のデザインを検討する(2011年6月16日)。デザイン面は学生に委ね、教員は技術的サポートに廻る。

アクアカフェで用いた大藪家土塀の土の再生



固まっている土塊を砕く。



ミキサーに移す。



水を入れて練る。日干しレンガ用には固練りでもよい。



型枠に入れてしっかり踏み固める。型枠の左右に出っ張りをつけ、自重を利用してトントンと軽い打撃を与えると、土が型枠から抜けやすい。



1回の授業で22個の土ブロックができた。(2011年4月28日)

日干レンガを積む



- 1_土台になる方の土の表面を水でベトベトに濡らす。
- 2_ゆるく溶いた練り土をたっぷり塗りつける。
- 3_日干レンガをしっかりと圧着させる。(土の表面がしっかりと絡み合わない、載せた日干レンガがはがれることがある)
- 4_上記の積み上げを繰り返していく。

つなぎの練り土が土のバンドになって、日干レンガどうしを結びつけ、乾くとがっしりと一体化する。

中が空洞の二重竹小舞による北壁に対して、厚さ24cmの無垢の土壁がゆっくり立ち上がっていく。

土ブロックは完全に乾き切ると日干レンガと言えるが、まだ芯まで乾いていなかった。一度にたくさん積むのでなければ、それで可とする。2009年秋の練り土積み (p.46) より技術力は向上した。



屋根のない南側にも土壁をつくりだしたため、梅雨にそなえて、竹材がむき出しになった屋根の未完部分に農業用ビニールシートを張る。これで雨が降っても屋内で作業できるようになった。

梅雨になり、濡れ続けた茅葺き屋根をふと見ると、キノコがびっしり生えていた。草も芽吹いている。特にイネワラ葺きの部分は湿気が抜けにくいようだ。しかし湿っているのは表面から数cmまで。厚みが30cmほどあるので、まだ当分雨漏りの心配はない。



2011/6/17

久住章 氏 左官ワークショップ

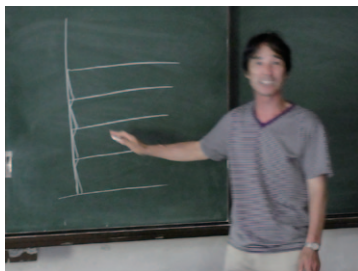
2011年7月14日

左官や土壁技術について、現場の第一人者といえる久住章氏を招聘し、レクチャーとワークショップを開催した。久住さんには、丹波地方の灰屋の研修でもお世話になった(→p.22)。

世界各地の土壁の技術と形についてお話いただいたあと、北壁の左官を指導いただく。

土塗りには、土1に対して1.5倍ほどの砂と、これまで入れていた量の2倍のワラを入れる。砂は収縮率を下げるため、ワラは補強のためだが、ワラが足りない。ところが驚くべきことに、身近な草でも代用できると教えられる。ワラでないといけないという思い込みが吹っ飛ぶ。

曰く、「伝統技術というのは、がちがちに尊重しすぎるとよくない。伝統というのはこれしかないという凝り固まったものどちがって、いろんな試行錯誤のなかで更新されて生きていくんや」。



久住章(くすみ あきら 1948-)

左官職人。兵庫県淡路市志筑出身。アーヘン工科大学の講師に招聘されたのを機に、世界各地の土壁を研究し、独自の技を練り上げる。象設計集団など建築家との仕事も多い。左官に関する技術の継承と向上に取り組む左官的塾(<http://home.p06.itscornet.net/sakan/>)を主宰し、全国各地で左官指導にもあたる。「カリスマ左官」とも呼ばれる。



ワラ代わりに、草を集めて3~4cmくらいに押し切る。



切った草を入れて土を練る。



久住さんのデモンストレーション。土浮きを抑えるヒゲコ代わりに出していたワラ縄を埋込んでくださる。鮮やかなコテさばきのために色が出る。



「職人は素人仕事をばかにするが、了見が狭い。素人さんのやることは、ときどき新鮮な発見に結びつく。そういう発見が伝統技術を生かす。」



上：土を塗る前に、壁を塗らしてコテで抑え、新旧の土がなじみやすいようにする。塗ったばかりのような表情がよみがえる。

右：手づくりのコテ板に塗り土を盛り、コテで壁土を塗る。北壁に土を塗るのは1年半ぶり。

*久住さんの指導が正しかったことは、10年たっても、土壁が無事なことが示している。



上と右：2011年秋、北壁の内側も久住さんの教えに沿って左官を進める。

重ね塗りする土は粘土質の赤土をクリーム状に練ったもの。左官ゴテを使うのはむずかしく、アフリカ風に手で塗ることが増えていく。



つちのいえのある丘は管理がなされず、夏は草がのび放題でジャングルと化す。坂道を上ったところに毎夏出現するツタのアーチは、「小清水の門」と呼ばれるようになった。アーチ越しに土塗りを終えた北壁が見える。(2011年11月6日)



電気と水

丘には当初、水も電気もなかったが、水は土づくりのために不可欠であり、早期に設備棟近くからホースをのばして確保していた。

電気は、モルタルミキサーをまわすのに、設備課からお借りした発電機を使っていたが、2011年秋、職員の方が電線を引くのに協力下さった。



2011年10月27日、設備課の山森さんの協力で、音楽棟裏の設備室から電線をひっぱり、竹置き小屋にプレーカーボックスをつけて、つちのいえに電気が通ようになった。発電機だと容量が足りず、ミキサーのモーターがよく故障したが、これで安定した電力供給が可能になった。



活動初期から、設備棟付近の散水用水道からホースをつないで水を確保していたが、のちに蛇口をつけて、より水場らしいものに仕立てた。(2013年5月9日)
初期は排水溝を掘っていたが、現在(2021年)は地面にそのまま流すだけ。

EVENT REPORT イベント・レポート 2011 07 13

https://www.ameet.jp/events/328/#page_tabs=0

<つちのいえ>プロジェクト

松尾 恵 (MATSUO MEGUMI + VOICE GALLERY pfs/w)

<つちのいえ>は作品ではない。

<つちのいえ>プロジェクトは、展覧会ではない。

香掛にある京都市立芸術大学構内の藪の中で、土壁に茅葺きの小さな家が、人の手によって建てられつつあるのみだ。プロジェクトを率いるのは、アーティスト：井上明彦氏(同大学美術学部准教授)。メンバーの教員や同大学学生が土や木やさまざまな道具・技術と関わりながら、素朴で美しい家を出現させようとしている。それは、個人と社会性がおのずとリンクすることによって、美術の内と外を行き来する汗まみれのワーク・イン・プログレスだ。

家の主たる素材である土は、取り壊された民家の古い土塀の土の再利用である。昨夏、京都国立近代美術館において開催された「生存のエシックス」の中の「水のゆくえ」プロジェクトが、美術館の入口に土の家<アクア・カフェ>を建てた。いま京都芸大で建てられつつある<つちのいえ>は、<アクア・カフェ>解体後の土の再利用なのだ。さらに遡れば、アクア・カフェ以前に、取り壊される民家の土塀との出会いに始まり、その土壁が2カ所で建造物となり、そのつど解体され、保存されてきたという経緯を辿ることができる。

<つちのいえ>は作品ではない。

<つちのいえ>の素材は、再利用という流通をしているが、

どのポイントにおいても利益をもたらさず、素材そのものも価値を上げることもしないからだ。あえて作品というならば、立ち上がってくる家もつ情報、建てるための技術と労働の等価交換という、得難い価値をもたらす点だろう。

井上氏は、人や技術や情報の交換過程に芸術の真意を読みとろうとしている。これからの世界を生きのびる知の器に見立てているようにも見える。あるいは、<つちのいえ>そのものが世界を表しているのかもしれない。

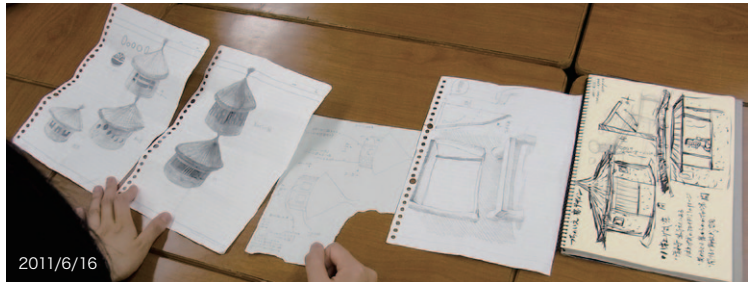
<つちのいえ>を訪ねたのは、梅雨の最後の中休みというような晴天の午後である。京都芸大は移転から30年経った。構内には、見捨てられたり忘れられた場所が生じている。<つちのいえ>は、校舎裏の草むらを登りきった木立の中にある。その空隙は、芸大の構内にあって、作品制作ではない芸術的行為が行き着くべき場所だったと感ずることができる。そこには、これまでと異なる価値の集落が発生する気配もあった。帰り道、イバラのゲートをくぐると校舎とその背後のニュータウンが見えた。いつもならうんざりするような風景だが、<つちのいえ>のあとでは、それら日々の営みも愉快に見えて来た。

<つちのいえ>は、井上氏らが担当する教育プログラムの側面ももっているが、非公開ではない。木曜日の午後、作業現場を訪ねることが可能だ。

窓づくり_1号壁

2011年6月~12月

南壁は、柱によって4つに分かれ、東から順に1号壁、2号壁、3号壁、4号壁と称し、それぞれ異なる窓の形式とした。



1_水場に近い1号壁の窓には、アクアカフェの窓枠を再利用してアーチを施す。室内のベンチから屋外がのぞける角度にするため、窓穴を壁に対して直角ではなく、斜めに振って設置。



2_窓枠の上の竹は、枠を左右の土壁に固定する工夫。



3_斜め窓からの眺め。



4_日干しレンガが足りなくなり、つくってまもない柔らかい土ブロックを積む。形を整えやすいが、乾燥による収縮率が大きく、ひび割れもめだつようになる。



1号壁ができたところ (2011年12月2日)。斜め窓やスリットが壁の厚重さを強調している。

続く2号壁も3号壁も、それぞれ異なる窓のデザインを施すことを決める。

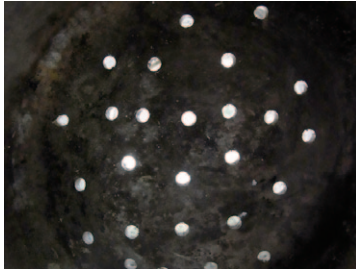
2011/7/7

窓づくり_2号壁

2011年秋

韓国からの留学生で博士課程環境デザイン領域の尹恵珍さんから、韓国の民家には杉丸太を壁に埋め込むやり方があると聞き、それを応用して太い孟宗竹を埋め込むことを検討する。

節に小穴をあけたり、節を全部取ったりして、分厚い土壁に「窓」をつける工夫をする。竹筒は太さも長さも不ぞろい。外側と内側で出張り具合も変えて、土を塗り込むうち、生きものの表皮のような、有機的な形状の壁が生まれた。



窓は外の光と景色を導き入れ、内部と外部を縫いつなく。



2011/11/17

竹筒を置いて、様子を探る。



2011/12/8

外側から土を塗る



2011/12/8

外側から土を塗る



2012/2/1

窓づくり_3号壁

2011年12月-2012年5月

3号壁については、ロフトをつくって、そこにのぼるための内階段に合わせて窓のデザインを考える。階段をアフリカのドゴン族風の梯子にする案が出て、またも大原野の大五さんから梯子に使えそうな大木をいただく。二つの窓の斜めの配置は、その梯子の傾きに応じたもの。結局、梯子は設けなかったが、のちに竹製の内屋根をつくってロフトを設けた (p.175)。



大木を梯子化できるか試す。

2011/12/15



未完の3号壁と4号壁。大木を置いてみた状態。

2012/1/26



2012/5/10



2012/5/10



壁は厚いので、窓枠を二重にする。枠に巻き付けた縄に土をしっかりと塗り込む。



2本つづれて直交する棧のある2つの窓は、梯子の傾きに応じている。

1号壁、2号壁の窓の自由な構成とは対照的である。